

玉川上水・野の花だより No. 19

半夏生（ハンゲショウ）

中央大学研究開発機構・機構教授 東京大学名誉教授

石川 幹子

2026年 6月17日

玉川上水の下流域で、開渠として残された稲荷橋～第2号橋のエリアは、生物多様性の宝庫となっています。夏草が繁茂するなかで、ひととき白い半夏生（ハンゲショウ）が咲きだしました。

半夏生（ハンゲショウ）という名前は、夏至から11日目、すなわち、7月2日から七夕頃に、白い葉をつけるからともいい、また、葉の半面が白いから半分化粧した意味だともいわれています（参考：新牧野植物図鑑）。

古くから、茶花として用いられてきました。玉川上水では流水と斜面地の境界部の湿ったところに生育しています。写真で白くみえるのが葉で、穂状の総状花序に多数の小さな花がついています。穂はつぼみのうちは、垂れ下がっていますが、開花が進むにつれて立ち上がってきます。開花が近づくと、頂部の葉が白くなり、開花後は緑色にもどるという不思議な植物です。稲荷橋～第二号橋では大群落が形成されており、都心における重要なエリアです。



半夏生（ハンゲショウ） 2026年6月9日撮影

玉川上水（稲荷橋～第二号橋の間の左岸）